



老いて亡くなることが
わかっていても、
受け入れられません。



かってもらいたいと投稿されたのではと、勝手に想像をふくらませました。

最新刊の7巻目の表紙には、「寝坊して雨戸開ければ人だから」とあります。

投稿者の本意はわかりませんが、つい寝坊した恥ずかしさと同時に、誰かに気にかけてもらっていたことへのうれしさも想像できます。

高齢になるにつれて経済、健康、孤独の不安が大きくなるという意味で、「高齢者の不安3K」という言葉があります。「シルバー川柳」の人氣には、これらの不安に関して、日常生活で感じる思いを誰かが代弁してくれていることや、私だけで



もりともたか
森 智崇
研修講師

老いることへの共感

全国有料老人ホーム協会が毎年、募集している「シルバー川柳」。単行本にもなり、ポプラ社からシリーズとして発刊が続いています。その1巻目の表紙には、次の川柳が載っています。

「誕生日ローソク吹いて立ちくらみ」。投稿者は63歳男性。みなさんはどんな印象をお持ちになりましたか？ 私は、「おじいちゃん、お誕生日おめでとう」とお孫さんにせがまれ、ローソクを吹き消したものの、予想外の立ちくらみに、こんなはずではなかったと、さびしさや驚きを通じて老いを痛感され、その思いを誰かに伝えたい、わ

老いて亡くなることが わかっていても、 受け入れられません。



はなかったと、多くの共感や同感する思いが伝わってきます。

さて、今回の問い③「老いて亡くなることが分かっていても受け入れられません」。シルバ―川柳のように、誰かと本を通じてでも笑いあっているときは、老いを受け入れられないという苦しみをほんの一瞬、ごまかしていけるかもしれません。しかし、お釈迦さまの示されたいのちのあり様は、老いて亡くなることを先送りにはできない、ごまかすことのできない無常のいのちでした。

となく、毎回、冷酷な言葉を返していました。

「何言よるの、ばあちゃん。みんな（年をとったら）そうなるんよ。」「みんな」という言葉に、祖母の苦しみを受け止めずに放り投げていたことを、お聴聞のたびに思い出し、気づかさず、痛みを覚えます。私の発した「みんな」には、私自身は含まれず、他人事でした。

晩年の祖母は、お仏間のある施設に入所し、よくお参りしていたようです。会いに行けば、以前より元気がない小さな声でしたが、いつものように苦しみを語ります。

「ばあちゃんはどういいい…。はやくいききたい…」

お釈迦さまは、どんな生き方をしようとも、生きるといふことは老い、病み、死んでいくこと、老いとは年を重ねることであって、若くても老いるのである、健康であり続けることはなく、必ずいつか臨終を迎える。

誰も決して避けることのできないそのいのちをどう生きていくか、という苦悩の問いを持たれご出家くださったのです。それはまさしく、生・老・病・死のいのちを生きつつ、苦悩に直面する私の問いでもあるのです。しかし、若さや健康にしか

その言葉に大きく反論したことがありました。祖母の言葉は、私の前からいなくなることを望んでおり、長年、坊守としてお聴聞を重ねてきたのに…と、孫として、駆け出しの僧侶として、どうしても受け入れられませんでした。

「何言よるの！ そんなこと言わんでいい！ 阿弥陀さんがおるんやろ！」と大きな声をぶつけてしまいました。

今思えば、阿弥陀さまがおるんやろ、という言葉も他人事でした。無言のまま天井を見つめる祖母と、ベットの手すりを握ったままの私。ただただ空しさ

を求め、いのちにおごったままであれば、その問いもどこまでも他人事として生きてしま

います。また他者のいのちも、そこから生じる苦しみに、他人事として接してしまいます。

そんなこと言わんでいいー！

98歳で往生した私の祖母は、高齢の苦しみをよく私に語ってくれました。

「見てごらん、手が震えて仕方ないよ。食べることが難しいとよ…。当時、高校生だった私は、その苦しみを想像するこ

ほうへ体を向け、思うように動かせない手を私の手に重ね、こう言ってくれました。

「あんたも来なんばい」
祖母の往生から時間が立ち、お聴聞のご縁をいただくにつれ、その一言を、「あなたも阿弥陀さまの願いのなかに生きていくのですよ。その歩みをし続けてくださいね。お浄土に生まれさせてまた会いましょう」と深く味わい、受け止めています。

今回の問いは、私自身のいのちの問いであり、大切な方、他者のいのちを思う問いでもあります。み教えを聞かせていただきつつ、何を本当にいのちの依りどころとして生きていくのか、今こそ見つめてみませんか。